老いることも　死ぬことも
人間という儚い
生き物の美しさだ
老いるからこそ
死ぬからこそ
堪らなく　愛おしく　尊いのだ

煉獄杏寿朗
「鬼滅の刃」第８巻より

「老いることも死ぬことも、人間という儚い生き物の美しさだ。老いるからこそ、死ぬからこそ、堪らなく愛おしく尊いのだ。強さとはというものは、肉体に対してのみ使う言葉ではない。この少年は弱くない。侮辱するな」by 煉獄杏寿朗

ジャンプコミックス「鬼滅の刃」/ 吾峠呼世晴作　第８巻より

◆この漫画で登場する人食い鬼たちは、その始祖も含めかつては人間であった。鬼の始祖によって鬼化すると怪我も再生し、分け与えられた血の量が多いほど奇しい術も使う。そのレベルは「上弦」「下弦」と呼ばれる12鬼月となると群を抜く。

映画「無限列車」で前半に対決する下弦の壱･魘夢は、人の心に入って夢を操りその精神の核を破壊する。物語の中盤をもって、単に武力でなくこういう深層心理を題材にしたというのは、少年誌においては思い切った設定ではないかと思ったが、昨今の少年少女はレベルが高いのかも？

夢とか心理の話は仏教・宗教でも大きなテーマの一つ。夢の中の戦いも興味深い。魘夢が敗れる際には**「計画が台無しだ。やり直したい、やり直したい。惨めな、悪夢だ」**などと、己の目論見が想定外に挫折して、執着がましい台詞が出てくるがここでは詳述しない。

ひとつ、空海作とも伝わるいろは歌で「浅き夢見し、酔いもせず」ともあるように、覚者･悟った存在＝ブッダから見れば、我々の脳は見たい夢を見ていて、本当には目覚めていないのだろう。

◆映画の後半、下弦の壱を倒したのも束の間、上弦の参･猗窩座（あかざ）が登場。破壊殺という武術を用い、今回のもう一人の主人公、炎柱・煉獄杏寿朗との激闘が始まる。そのスピード感と迫力あふれる描写は息もつかせない。このアニメの最大の見どころだ。

強敵同士の戦いの中で、猗窩座は**「お前が至高の領域に入れないのは人間だからだ。老い、死ぬからだ。死ねばその技も失われてしまうぞ、鬼になってもっと俺と戦おう」**としつこく誘うが、杏寿朗はきっぱりとはねつけるのが上のセリフ（文中の少年とは主役・炭治郎のこと）。映画公開後、早速いくつかの寺院で法語として掲示されたようだ。

いつからか我々が死を不幸と呼び、老病死に怯え忌避してしまうのは、有限な身体を持つがための宿命と言える。切磋琢磨を重ねても加齢とともに頭打ちとなる。いかに達人的な武術・芸術を極め、あるいは長寿を得たとしても、その領域・境地は個人の死とともに失われてゆく。

その故、不老不死は人間が追い求める古来からの欲望でもあり、それをテーマにしたさまざまな芸術作品や健康法なども生まれた。現代医学は救命や長寿に大きく貢献している一方、延命措置、生殖医療、臓器移植などは負の部分も生み出している。

◆仏法は自然界の道理「**諸行無常**」を説き、いのちの**生老病死**を思い通りにならぬ「苦」と明らかにする。我々はその認めたくない事実をどう受け止め、またどのように積極的な価値を見出したらよいのだろうか。

釈尊以降、仏教を伝えた高僧の一人曇鸞大師（中国･北魏 476-542 年）は、苦労の末に道教指導者・陶弘景より仙経（不老長寿法）十巻を授けられた。

しかし菩提流支三蔵と出会い「たとえ一時の長命を得ても所詮迷いの境界に過ぎない」と指摘され、**観無量寿経**の浄土往生の教えを受けると、仙経を焼き捨てて**阿弥陀仏**に帰依したという有名な説話がある。

誰もがずっと壮健で、右肩上がりに努力研鑽を続けることはできない。突然の災害・事故や想定外の困難にも見舞われる。新型コロナ禍では著名人も容赦せず、お見送りには直接触れることも叶わない。

そんな不条理さを考えれば、力強く前向きで生きることだけが価値あるとも言えない。我々はだからこそ、普遍的で本質的な救い､「いのちの尊厳」というものを、世俗的価値を超えたどこかに求めたいのだろう。

どのような生老病死を送ろうとも、誰にも等しく備わったのは、やり直しの効かない一回生のいのち。その限られた時間の中で、**因縁**調って現れたのが「私」と称する存在だ。よい時も悪い時も、あるいは失われると承知しながらも精一杯愛おしく味わい尽くせるよう、「世は夢幻し」「真実なる仏の世界」という教えが、執着を捨て前を向く支えになるのかもしれない。

皆一度きりの人生、胸を張って生きろと煉獄さんの声が聞こえてくる。（文責：報恩寺　林　暁）